

今夏、八代海を襲った赤潮被害

～早期支払いと実質補償が「ぎょさい」の使命～

今夏の7月、熊本県芦北郡津奈木沖で発生した『コックロディニウム・ポリクリコイデス』による赤潮は、およそ3週間にわたって猛威を振るい、八代海で営まれている魚類養殖業に甚大な被害をおよぼした。県水産振興課の発表によると、被害総額は39億8千万円、養殖魚のへい死尾数は290万尾にもものぼり、全国的にみても史上2番目の規模の赤潮被害となった。被害は1市8町にもおよび、漁種別ではカンパチ16億5千万円、ハマチ13億5千万円、トラフグ5億円など広い範囲で被害が報告されています。

こうした中、一刻も早い養殖の再開に資するため「ぎょさい」団体は9月末までに2億2千万円の共済金を支払った。赤潮関連の支払いは今後も予定されており、最終的には総額で3億円弱の支払いになると見込まれています。

一昨年、広島県で発生したヘテロカプサ赤潮による養殖カキの大被害も未だ記憶に新しいが、こうした災害発生時に常に感じるのは、被災地区の漁業・養殖業が「ぎょさい」に十分加入していたならば、どれだけ復旧の手助けになっただろうかという事です。

近年気象・海況異変や異常災害が多発しております。被害を受けた漁業者に対し迅速な共済金支払いと、十分な被害のてん補を通じ漁業経営の安定を図ることを「ぎょさい」は目指しております。

被災された漁業者の皆様にご心からお見舞いを申し上げますとともに、「ぎょさい」制度の全国的な拡がり浸透について、今まで以上に推進してゆく必要性を痛感しているところです。